

組織の概要 (企業)

会社名

有限会社 森本技研

所在地	〒399-8301 TEL:0263-84-5055 FAX:0263-84-5055 E-mail: singo-morimoto@nifty.com		
ホームページ	未開設		
設立年月	2001年4月		
代表者	森本 信吾	担当者	森本 信吾
資本金	500万円	従業員数	3名
沿革	大手化学メーカーに30年間勤務し、研究開発関係の仕事に従事するなかで工程改良、省エネルギーで実績を上げるとともに最近注目されているカーボンナノチューブの一種の量産技術を開発してきた。その間で身に付けた技術を形を変えて世の中に役立てるためにコンサルタント会社を設立した。 但し、現在は長野県の嘱託職員として重要な仕事を担当させられているので業務の方は事実上、全くできていない。 休眠状態		
事業概要	定款より 炭素、セラミック製品の製造技術のコンサルティング 熱及び電気エネルギー利用技術のコンサルティング など コンサルティングを行う傍ら故郷に所有する山を利用して実証試験をしている。その一つが里山周辺で繁茂し、土砂崩落が懸念されている孟宗竹の有効利用である。もう一つは伐採後の再生能力が強い広葉樹林の比率拡大である。今回の提言は両者を利用した技術である。特許化などの意志は無いので有効活用していただけたらとところがあれば利用して欲しい。		
環境に関する活動実績	特記できる実績は無いが常に環境を意識し、選択種があれば環境にやさしい方向を選択している。		

売上高(14年度) 若干 円

政策の分野

- ・ 自然環境の保全
- ・ 地球温暖化の防止

政策の手段

・ 従来建築用材として植林されていた針葉樹に代わって広葉樹主体の植林をすることで山の景観、地力の回復、防災機能の回復、保水力の向上など山本来の姿を取り戻す。そのために必要な広葉樹の苗を移植に適した形で育苗する手段を提供する。

団体名：有限会社 森本技研

担当者名：代表取締役 森本信吾

政策の目的

管理不足によって荒廃しやすい針葉樹林に代わって山本来の姿である広葉樹主体の山を取り戻す。

背景および現状の問題点

昭和20 - 30年代に伐採した後に松、杉、桧などの建築用材向けの針葉樹を国の政策に従って植林したが、経済構造の変化、住環境の変化、労働の多様化などで山に木を植え、育てることが経済的に成り立たなくなっている。植林したままに放置された山は保水力が低下し、災害の遠因にもなりかけている。直接感じる話としては四季の移ろいを身近に感じる山の色が無くなり、感受性の高い日本人の今後の情緒維持にも警告が出されようとしている。悠久の歴史を持つ山の本来の姿である広葉樹主体の山に戻すのは針葉樹に切り替えた人間が行わなければならない。その広葉樹の苗の確保難をあちこちで聞くので工夫をした。

政策の概要

植物学者ではないが広葉樹の一つのクヌギ(中国地方ではポピュラーな広葉樹)の一生を椎茸栽培しながら見ていると、ホダ木用として伐採した翌年から、新芽が沢山出てくるので活力のあるのを残して剪定すると急速に成長し、15 - 20年で直径が10 - 15cmに成長し次のホダ木に使えるようになる。これを繰り返せば良い。このサイクルできる台木を確保するのは大変である。更地にどんぐりを植えたのでは成長が極端に遅いので倍から3倍年月がかかる。広葉樹の幼少期は生存競争に弱いので一人前の台木に育てるには人間の手助けが必要である。

まず種の採取 クヌギのどんぐりの結実年をみていると毎年どんぐりが出来るのではなく、結実する年がある。気ままな自然を相手の作業なので大変ではあるが採取できた種で苗を作るしかない。計画を立てることが困難ではあるが仕方ない。

次は苗興し ここに今回の提案がある。林地に直接どんぐりを蒔くには5 - 10個をまとめて植えることは既に行われている。また植林に使える苗を畑で育てる場合は4 - 5年かかり、活着率も高いとは言えない。そこでこれから説明する育苗法がある。

準備するもの どんぐり、竹(直径10cmぐらい、肉はあまり厚くないのが良い)

時期 どんぐり採取後早いほうが良い、時間がかかるときは乾燥させないこと。次年度の春までに行うこと、

処理法 下の節を残して30 - 35cmに竹を切る (一節分)

底の節にパチンコの玉大の孔を4 - 5個空ける

底から約20cmほど土を入れる

どんぐりを3 - 4個入れる

約5cm土を入れた後土に埋める。両方の土のレベルは同じ位

育苗 芽が出ればそのまま育てる。特に手はかけない。草が多い時は取る程度。

移植 秋になって葉が落ちれば移植が可能になる。竹筒ごと掘り起こし、予定場所に定植する。

その後の管理 周囲の草を取る程度で成長を見守る。周囲の草を越える程度になれば間引いて一本に仕立てる。

注意事項 植林場所の生態系をあまり崩さない為に現場に近いところで苗興しをするのが良い。

使用する竹は 2年年物が良い
竹筒にあける穴は底のみのほうが良い。

技術の応用 実証はしていないが次のことをすると効果的かもしれない。
移植時に遅効性の肥料を併用する
竹には割を入れておくとよいかもしれない

技術の付随効果 苗の根っこの部分は竹筒にガードされているので刈払い機で草刈する時、刃が多少あたって問題はない。作業がやりやすくなる可能性がある。

政策の実施方法と全体の仕組み

特にシステムティックに計画を立てるほどのものではない。役立つと思う方に実践してもらえれば良い。

政策の実施主体（提携・協力主体など）

前述の通り

政策の実施により期待される効果

どんぐりを林地に直接植えた時の2年目の姿と、竹筒法で1年間飼育後林地に定植して1年経過したものの現場写真を掲載します。どんぐりは同じ日に蒔いたのであるが成長度は明らかに違う、今後も経過観察するが実際に役立つ手法と考えている。

比較には同じ所に撮影してある長さ約15cmの石と比較してください。

A：林地に直接どんぐりを植えた時



B：竹筒育苗をした時



その他・特記事項

気ままな広葉樹との付き合いは大変である。今までの工業技術の発想では対処し難いところがある。例えば、どんぐり自体が採取出来る年と取れない年がある。計画経済的に今年はこちらに植林する、来年はあそこにと計画は無いかも。種の多い年に精力的に植林するなどの対応の多様化が大切である。発想を変えて本来役立つ広葉樹主体の林地を多くしたいものである。成長した広葉樹の利用については今後考えていくが建設用材としてではなく家具用などとしての利用、木炭・人工石炭としての利用など考えていきたい。